



こーひーぶれいく



岩手の草原を駆け抜けるトライアルライダー
([KONDO SPATARO] Official blog より)

自然豊かな大地を駆け抜ける

古川 修

Furukawa Osamu

岩手県北部の北緯 40 度線に沿って、八幡平市から三陸沿岸の普代村まで 11 市町村の雄大な自然の中（往復距離：約 270km）を 2 日間かけてオートバイで駆け抜ける「イーハトーブ・クラシックトライアル」は、1977 年から毎年行われています。最近の寄る年波には勝てず、観戦が多くなりましたが、私も 1984 年から 10 回ぐらい参加しました。

オートバイトライアルとは、1911 年、スコットランド・エディンバラの SSDT (Scottish Six Days Trial) が発祥のオートバイ耐久レースで、走りにくい自然の岩や斜面、ガラ場を使って区画を作り、そのエリア内でオートバイを巧みに操って、いかにして足をつかないように走りきるかを競う競技です。簡単に言えば、足をつく回数が少ない競技者が勝者です。競技者が足をつかないでエリアを出れば、ブーツの裏はきれいですから、それを「クリーン」と呼んでいます。

イーハトーブ・クラシックトライアルのような長丁場のコースでは、出場者自身のライディング力量と共に、オートバイの知識と普段からの整備経験が重要となります。と言いますのは、故障したオートバイはレース中、原則自分で修理しなければならないからです。過去の本レースにおいてマシントラブルが発生して途中リタイアした車両を観察しますと（明らかに、こけて破損したものは別です）、かなり新しい車両が、または、古い車両が多く見かけられました。これは、縦軸に故障回数、横軸に使用時間を表した機械の寿命特性曲線（Bath-tub curve）を思い出させます。車両が新しくて状態をまだ良く把握できない初期故障期、整備方法が分かり故障が

少なく安定している車両の偶発故障期（こけて破損）、車両が古くなって部品の摩耗故障期ということです。

トッププロのトライアルライダー（我が国では、たった 4 人程度）と違って、アマチュアライダーには、専属の整備士が当然おりませんから、一定時間の周期で点検や修理を行い、マシンの性能を維持するしかありません。故障予防保全の観点からは、定期的に部品を交換すれば良いのですが、悲しいことに、稼ぎが無い趣味の領域の人では、部品が壊れてから交換・修理することが多くなってしまいます。

では、どのようにしてマシンの良い状態を維持し、壊れないようにするのでしょうか？ 答えは簡単で、まずは自らの五感（正確には四感）を働かすことです。機械（オートバイ）は、正直者ですから、① 見る（ボルトの外れ・曲がり、オイルのにじみなど）、② 音を聞く（異音、発生音のムラなど）、③ 各部に触ること（異常な部分的な高温、変な振動など）、④ においを嗅ぐ（樹脂類、各部の異臭発生など）を丁寧に観察すれば故障がある、又は発生しかかっているのをかなりの精度で見出し、防止できるでしょう。

ご承知のように、イーハトーブとは、宮沢賢治が岩手の風土に立脚しながら、心の中に思い描いた理想郷です。本トライアル大会の創始者たちが「日本の SSDT の舞台」を探して岩手県を訪れ感動し、宮沢賢治の実弟・故宮沢清六氏に承諾を得て大会名に使用しているとのこと。理想郷をオートバイで走り回るので、豊かな自然や生態系の保護に配慮することが重要となっており、本大会ではオートバイ走行によって排出される CO₂ をオフセット（ファンダ拠出）する取り組みを行っています。

よく整備されたマシンを操り、自然豊かな岩手の大地を駆け抜けるこのような素晴らしい大会が永く続くことを願うのは、私だけではないでしょう。

((公社) 日本アイソトープ協会)